〈研究ノート〉

松山市若年層方言話者がもつ言語意識
―全国県民意識調査との比較―

高須賀　萌

キーワード：言語意識，松山市方言，全国県民意識調査

1. はじめに

現代の方言話者は，様々なメディアを通じて様々な方言に囲まれて生活しており，自分自身の方言のみならず周辺の方言に対してなんらかのイメージを抱いているといえる。松山市に住む若年層方言話者は，周辺の地域や方言に対してどのようなイメージを抱いているのか興味深い。そこで，本稿では，筆者が2010年に松山市の高校生に行った調査とNHK放送文化研究所が1996年に行った全国県民意識調査の結果を比較する。

2. 松山市の高校生がもつ言語意識と全国県民意識調査との比較

松山市高校生の調査結果のうち，各地域の方言について16評価語で尋ねたものを情的・知的の値で示す。これをNHKの1996年県民意識調査の「土地のことばが好き」（情的尺度とする）・「なまりが恥ずかしいと思う」（知的尺度とする）の項目を値で示したものと比較する。この二つの調査の性質上の違いは，松山市高校生の調査が他地域のことばへの評価（伊予弁を除く）であるのに対し，NHKの県民意識調査が自分の住んでいる地域のことばへの評価であるという点である。

松山市の高校生がもつ言語意識と全国県民意識調査の「土地のことばが好き」「なまりが恥ずかしい」の二項目をまとめたものが以下の図1である。

松山市高校生の値が図1の原点付近に,NHK県民意識調査の値が原点から離れたところに集中している。松山市高校生の値で大阪弁が情的マイナスの位置にあるのは，松山の高校生から見た大阪弁への意識（いわばステレオタイプ）を反映しているためであると考えられる。

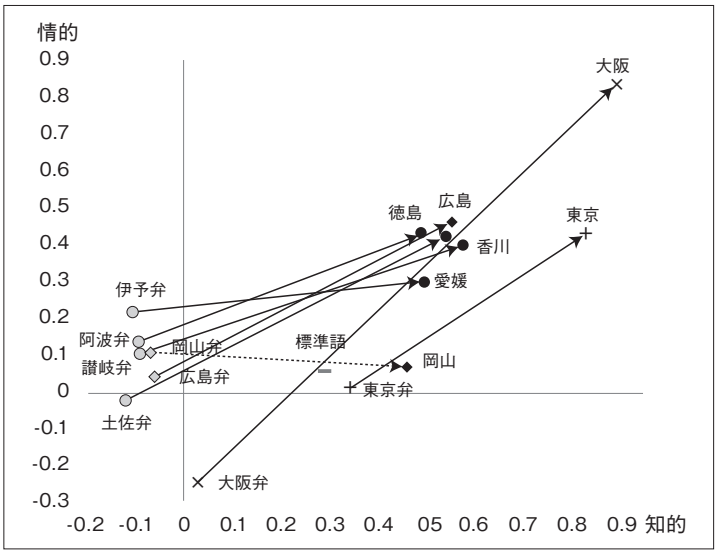

図1　松山市高校生 16〜17歳・NHK 16〜25歳

3. 考察とまとめ

松山市高校生の値とNHK県民意識調査の値を矢印で結んでみると，岡山を除くすべての県の矢印が右上（知的・情的プラス）を向く。全体として，他地域のことばへの評価より，自分の住んでいる地域のことばへの評価のほうが情的・知的ともにプラス評価を与える傾向にあるといえる。

〈注〉

（1）調査は2010年に筆者の出身校，私立済美高校（愛媛県松山市湊町）で行った。本調査の対象としたのは2年生（16〜17歳）で，163人のインフォーマントの回答を分析対象とした。

（2）NHK全国県民意識調査は第1回（1978年），第2回（1996年）の過去2回行われており，本研究では第2回の1996年調査を参考に分析した。なお，分析には16〜25歳の若年層の値を用いた。

参考文献

NHK放送文化研究所編（1997a）『現代の県民気質―全国県民意識調査―』

NHK放送文化研究所編（1997b）『データブック　全国県民意識調査　1996』日本放送出版協会